

の流注説明の文末に「此順行逆数之屈折也」という一文があるので、肺経の循行経路は邪客篇では逆に述べたに過ぎず、馬王堆帛書を除くいずれの書の記載も、肺経が胸から手指に進む循行は一致しているとされる。

Ⅱ. 『足臂十一脈灸経』と『陰陽十一脈灸経』の経脈の循行は、比較的簡略で、未完成である。

Ⅲ. 『靈枢』邪客篇では、経脈の流注において「與陰諸絡。會於魚際。數脉并注。（本節の後ろの魚際の部分で、手少陰心経と手厥陰心包経の諸絡と相会し、數脈が並んで注ぐ）」と『靈枢』経脈篇と異なる部分がある。

Ⅳ. 『靈枢』経脈篇、『靈枢』経別篇などにもとづくと、手太陰肺経の循行は下記の通り。

①中焦に起こり、中焦から下行して大腸を絡い、大腸から戻って胃口（噴門部と幽門部）に至り、膈（横隔膜）を貫いて肺に属す。

②その主幹線は肺系（気管）の両側に沿って上行し、鎖骨下に至って、横に行き、第1肋間の外側に至って体表に出て、下に向かって屈曲し、腋下前方に至る。さらに上肢内側を循行し、手少陰心経と手厥陰心包経の前方を進み、直に下って肘の中に至る。肘関節の内側前縁を経て、前腕内側の橈骨下縁を循り、橈骨茎状突起内側で動脈の拍動が手に感ずる部分に至り、魚際の赤白肉際（肢体表面の外側面と内側面の境）に沿って、母指爪甲の橈側端に到達する。

③その支脈は腕関節の上方から分かれ出て、第1,2中手骨の間<sup>めぐ</sup>を行き、示指橈側面に沿って示指の指端に到達し、手陽明大腸経と接続する。

④肺経の別支は2支ある。

その1支は、腋前の手太陰経から分かれ出て、淵腋部に進入して、手少陰経の前<sup>めぐ</sup>を行き、胸中に進入して、肺に分布し、肺経に沿って下行し、膈（横隔膜）を貫いて大腸に布し、大腸と連系する。

もう1支は肺中から分かれ出て欠盆（鎖骨上窩）の内側縁を循り、喉嚨（咽喉部）を循って下顎部に至り、手陽明大腸経と接続する。

⑤肺経の絡脈は腕関節の上方1寸5分のところにある列欠穴から分かれ出て、横に行き、手陽明大腸経に通じている。列欠穴のところからはさらに1本の絡脈が手太陰肺経と並んで下行し、掌中に進んで魚際（母指球）に散ずる。

⑥『靈枢』邪客篇によると、第1中手骨近側端から分かれ出た1本の絡脈が内側に向って屈し、手少陰心経、手厥陰心包経と魚際部で交叉し、數脈が並んで流注するとする。

⑦『素問』繆刺論によると、手足の少陰・太陰・足陽明の5絡は、耳中で会している<sup>めぐ</sup>ので、肺経の絡脈の1枝も耳に流注していると考えられる。